海外の宗教事情に関する
調査報告書

平成１７年３月

文　化　庁

Title : kaigai-no shūkyō jijō-ni kansuru chōsa hokoku

2004 March

Bunka-chō

Research Report on Religious Affairs in Foreign Countries.

国は各地を征服する度に教会の一つをモスクに転用し，その代表がイスタンブルのアヤ・ソフィヤである。かつて東方キリスト教の司教座教会はコンスタンティノープルにあり，帝国領土のブルガリアやバルカン半島に多数のキリスト教徒が居住していた。現在も小規模だがイスタンブルにギリシア正教会の司教座教会がある。

オスマン帝国時代は特にキリスト教徒，ユダヤ教徒が多数居住し，ミッレト制によりある程度の自治と自由を得ていた。帝国末期に次々と周辺の領土を失い，ローザンヌ協定でギリシア人とトルコ人の居住地交換もあり，トルコ共和国に残った非ムスリムは少数である。アルメニア教会は，1461年オスマン帝国がイスタンブルを征服した後，メフメト2世によって，ギリシア正教以外の諸教会の代表教会として司教座教会が設立された。スルタンによって設立されたという，キリスト教の歴史においても稀な教会であり，現在も同じ地にある。19世紀の混乱まではキリスト教諸派の代表としてスルタンとの交渉窓口であり，司教座の管轄領域も広大だったが，現在はトルコ国内だけである。アルメニア人は19世紀の対立と混乱の激化で祖国アルメニアへ移住したり，虐殺されたりで人口は激減した。

4.2.1. キリスト教諸教会

キリスト教徒の中でなお多数を占めるのはアルメニア人である。彼らも19世紀以後20世紀初頭にかけての帝国解体とナショナリズムや民族対立の激化で，人口が激減し，かつてはアルメニア国境近くの東部に居住していたが，現在はイスタンブルに集中している。渓谷の対岸がアルメニアであるカルスという町にはアルメニア教会の遺跡が林立している。この地域は一時ロシア領だった。かつての絹の道の一部だったという橋は無残に壊され，カルスから現ロシア領に延びていた鉄道もカルス止まりとなっている。トルコでは混乱期に強制や便宜的理由でムスリムに改宗した者も多いという。司教の話では改宗者はモスクへは行かないと語り，名ばかりの改宗を示唆したが，祖父の代でムスリムに改宗した市井のアルメニア人はムスリムとの関係は良好だと語った。神学校は1926年の教育の統一により閉鎖され，以来イタリアやイスラエル，アメリカなどで聖職者教育を受けてトルコへ戻る。アルメニア人学校が小学校と中学校を持っているが，その卒業とわかると就職等で差別を受けるというのが，司教の話で，アルメニア人の友人も多いという日本人でイスタンブルで働く女性によると，そうとは思えないとのことである。

現在トルコ内のギリシア正教徒は非常に少数だが，現在もイスタンブルには司教座教会がある。イスタンブルから近いマルマラ海の島に神学校があったが，閉鎖されており，現在再開への動きも見られる。

シリア正教会も以前はシリア国境近くの東南部に多数が居住していたが，経済的理由その他で現在は大半がイスタンブルに住んでいる。ただ，修道院と教会が東南部のマルディンに残っている。シリア語文字とシリア語での礼拝を行っている。

4.2.2. ユダヤ人の歴史と現状

①歴史

現在のトルコにおけるユダヤ人共同体は小さいが，長い歴史を持つ。ユダヤ人がトルコに住み始めたのはアレクサンドロス大王時代に遡り，トルコ民族が11世紀に小アジアを征服後も，平和に共存してきた。15世紀末イベリア半島のレコンキスタにより多数のユダヤ人，セファルディがオスマン帝国に避難してきた。スルタンは彼らを迎え入れ，イスタンブル，イズミル，エディルネ等主要都市に住まわせた。彼らは既存のユダヤ人より有力になっていった。オスマン帝国はミッレト制により特にユダヤ教，キリスト教の啓典の民に一定の自治と自由を認めた。ハハンバシュ (Hahambaşı) と呼ばれる最高ラビがユダヤ人共同体の最高責任者である。オスマン帝国の解体，共和国の成立の過程で，ローザンヌ協定第3部(37-45条) は少数派の権利保護を規定しているが，ユダヤ人共同体は公式にこの少数派の特権放棄を宣言し，トルコ国民となることを選んだ。現在，彼らの法的地位は，憲法によって宗教による差別は禁止され，信仰および儀礼遂行の自由を認められている。

②現在のユダヤ人共同体

トルコにおける20世紀初頭のユダヤ人は14万7,000人で，各地の都市に居住していたが，現在は2万から2万5,000人程度で，その大半がイスタンブルにいる。この急速な人口減は20世紀前半にアメリカへの移住者が増え，イスラエル建国以後にはパレスティナへの移住が増えたためである。

現在もユダヤ人共同体は最高ラビ，ハハンバシュが宗教に関する諸問題の最高責任者である。最高ラビはユダヤ人共同体の代表により選挙され，トルコ政府によって任命される。2002年に最高ラビの交代があり，イサク・ハレワ (R. Isak Haleva) が現在最高ラビである。この下に宗教部門会議 (beth din) と世俗部門会議 (lay council) の二つがあり，最高ラビの行政を補佐する。共同体の秩序財政問題は世俗部門会議の幹部委員会により運営され，幹部委員は世俗部門会議で選挙される。宗教部門会議は合法的食べ物，誕生，婚姻，離婚の登録といった宗教的手続きを担当する。

トルコのユダヤ人共同体には多くの伝統が混在しており，95%はスペイン系ユダヤ人で，残りが中央および東部ヨーロッパ出身のアシュケナージ (アシュケナズ) である。ごく僅かだが，ラビの解釈を認めず，聖書のみを権威とするカライ派ユダヤ人 (Karaite Jews) や，シャブタイ・ツヴィ (Shabbetai Tsevi) の教えを守るシャブタイ派 (Shabbateans) (トルコ語ではドンメ (dönme) という) 少数派がいる。

スペイン系ユダヤ人の伝統言語はラディノと呼ばれるスペイン語で，フランス語も使われる。だが，長い共存の歴史があり，年配者も訛りはあるがトルコ語を話し，中年より若い世代はトルコ語を流暢に話し，それを第一言語とする傾向が見られる。ただし，イスタンブル在住のユダヤ人はなおスペイン語を話し，ユダヤ人共同体の社会文化を報道する週刊新聞 (*Şalom*) はトルコ語だが，うち1頁はスペイン語である。この新聞はトルコにおけるユダヤ人共同体の文化活動と伝統を取り上げ，それに関連する出版も行っている。一般に最近，トルコ語でのユダヤ教，イスラエルに関する書籍も増えつつある。トルコ人ユダヤ教徒に伝統的共同体の精神の存続を保つために文化的協会が大きな役割を果たしており，ユダヤ人だけの社交クラブやスポーツクラブもイスタンブルとイズミルにある。こうした活動はユダヤ人と共同体の絆を強めるのに役立っている。

オスマン帝国末期と共和国初期には，多くのユダヤ人が政治に関与し，何名かはオスマン帝国議会の議員に選出された。テキン・アルプ (Dostluk, Amical, Mahazike Torah and Or ha-Hayim, ユダヤ名 Moise Cohen) 等何人かは共和国初期に政治活動に関与した。少数派が激減した共和国時代には，一部を除いて政治活動から離れた。最近1990年代にユダヤ共同体の有力な一員が議員に当選したが，すでに政界を去った。政治活動への参加の是非は共同体内部でさまざまに議論されており，間もなく行われる2004年の選挙にはユダヤ人候補の出馬はないと予測され，これは共同体内部の決定を反映している。

③教育機関

トルコのユダヤ人共同体は近代的学校を19世紀半ばから設立し始め，最初に1850年にエディルネに近代的ユダヤ人学校がジョゼフ・ハレヴィ (Joseph Halevi) によって建てられた。1867年に始まったイスラエル連携学校 (Alliance Israelite schools) は，ヨーロッパ東部のユダヤ人の近代化を目的とするフランスのユダヤ人の支援で，トルコの諸都市に建設された。彼らはフランス文化の中で高度な教育を受けたユダヤ人たちのグループだった。その学校での使用言語はフランス語で，その教育内容は近代的だった。第一次世界大戦の直前の1910年，1万人ほどの生徒がその学校に通っていた。トルコ共和国成立以後，教育の統一政策によりすべて閉鎖された。

今日のユダヤ人教育は私立で幼稚園，小学校，中学校を備えたウルス・ユダヤ人学校 (Ulus Özel Musevi Okulları, Ulus Private Jewish Schools) がある。この学校は最高ラビが設立し，ユダヤ人慈善協会の支援で運営されている。ウルスに移転する前はイスタンブル中心街のベイオウルにあった。学校の規模は小さく，共同体の要望に応えられていない。多くの家庭がさまざまな理由で子供を公立学校や教育水準の高い私立学校に通わせている。一部の子弟は海外で大学教育を受けるが，大半はトルコの大学へ通っている。

宗教教育は伝統的にラビたちによってヘデル (heders) とタルムード・トーラー (Talmud Torahs) という機関で行われてきた。各地の共同体がヘデルを持つが，現在宗教学校の数も生徒数も減少傾向にある。宗教教育の主要機関は，最高ラビと協力してニッサン・ベハル (R. Nissim Behar) が設立したマハジケ・トーラー (Mahazike Torah) である。この機関がトルコ政府の許可を得て，イスタンブルやイズミルで夜間講座や他の教育活動を行い，各地のタルムード・トーラー学校を運営している。主要な教育内容はヘブライ語とユダヤ教の基礎知識と聖書等の学習である。現在トルコにはイェシュワ (yeshiva) というラビ養成学校はない。ラビはイスラエルかヨーロッパなど海外で専門教育を受ける。現在の最高ラビはイスラエルのイェシュワで学んだ。彼は最高ラビとなった直後のインタビューで，若い世代はユダヤ人以外との婚姻が進み，伝統的宗教知識の乏しい者が増え，共同

体の存続にとって深刻な問題となっていると語っている。

④トルコ人社会との関係

一般にユダヤ人共同体はトルコ社会と良好な関係を維持してきた。無論公的な差別は一切ない。しかし，ここ十数年では，イスラエルとユダヤ人を標的としたテロ活動が起こっている。1986年にテロリストがイスタンブルのネヴェ・シャロームシナゴーグで礼拝中のユダヤ人23人を殺害した。2003年11月23日同じネヴェ・シャロームシナゴーグと近くのベス・イスラエルシナゴーグで自爆テロがあり，ユダヤ人6人，ムスリム14人が死亡し，300人以上が負傷した。これはトルコで最悪のテロ活動とされ，事件直後現首相エルドアンは最高ラビをその事務所に訪ね，遺憾の意を表した。これはトルコの現代史で，首相がハハンバシュを訪問した最初である。

現在のユダヤ人共同体は約2万5,000人程度で，非ユダヤ人との婚姻も増え，その存続に努力している。伝統文化復興や帰属意識の強化は共同体による文化的宗教的活動の結果だといえるだろう。トルコは世俗国家であり，ユダヤ人も他の国民と同等の権利を享受し，ユダヤ人共同体の指導者はトルコ政府と良好な関係を維持している。シナゴーグへのテロ等があったが，概してユダヤ人はトルコで平穏で豊かな生活を享受しているといえるだろう。

おわりに：現代のトルコ社会とイスラーム

トルコは顕著にイスラーム社会である。しかしイランと比べると，全般的にトルコは開放的であり，スカーフ着用者も多いが，日本や欧米と変わらない若者も多い。トルコの1980年代の変化は非常に興味深い。経済発展と同時並行にイスラーム化も進展したのである。トルコでは放送やマイクを用いてアザーンが告げられるため，どこにいても日々5度それを聞く。郊外の新興住宅地に新しいモスクが目立つのもトルコの特徴である。

断食月には相当数の人々が断食を遵守している。神学部の学生はむろん，学生食堂も開店休業に近く，学生がたむろしていてもお茶も飲まずに話している。しかし国立大学ではその期間も食堂は開かれている。その期間，多くのテレビ局が

断食が終わる夕食（イフタール）前にイフタールに向けてという番組を放送し，神学部教員のさまざまな話題，イスラームに関連するテーマに限らず，家庭や教育，社会問題などの討論，また宗教的伝統的な音楽，クルアーン朗誦がある。トルコは西暦だが，断食月の開始と終了はイスラーム暦に従い，日々のイフタールの時間は各地で異なる。つまり厳密に日没時間で定められ，番組の途中にアンカラ，ブルサ，イスタンブルのイフタール時間が告げられる。ときにはヨーロッパのトルコ人共同体のイフタール風景も映される。イフタールにテントで1日1,500人分の食事が振舞われる慣習も，最近盛んになりつつある。断食月には，多くの商店，レストラン，スーパーマーケットが断食に入る時間と日々の礼拝時間，イフタールの時間が詳細に記された時刻表（イムサルック）を用意し，人々は家に持ち帰る。家庭に時計のなかったオスマン時代からの慣習とのことだが，断食前の食事準備を告げるため，真夜中に太鼓を鳴らして知らせる。

トルコは共和国成立以後，着実にイスラーム化傾向を強めてきたが，それが国家管理の宗教教育の成果である以上に，種々のワクフや協会活動によるモスク建築や宗教関連教育，さらにマスメディア等の発達がイスラーム啓蒙に果たす役割が大きいと思われる。

今回のトルコ調査では福祉関係の施設を調査していないが，教育と福祉に関しては国家予算を見るだけでは見落とす豊かさがある。ワクフや諸協会の資金によって補われていることは確かだろう。ワクフやデルネクの箇所で述べたように，多数派を占めるスンナ派イスラームは，国家管理の宗教活動，宗教教育と区別しがたい協力関係で活動を支えている。他方，イスラーム系諸団体あるいは宗教運動もまた，デルネク等によって活動を支えられている。トルコの宗教団体は団体として組織されず，デルネクなどの一般的協会組織との関係で考察される必要があるだろう。

トルコの宗教事情を考察するには，国家と宗教の関係だけを観察してはわかりにくく，トルコの市民社会の成熟はかなり大きな要素を占めると思われる。市民社会の成熟，経済発展，消費社会の到来がイスラームを排除するのではなく，イスラーム化を同時に深化させるように見えるところが非常に関心をそそられる。その原因が何かは今回の調査ではとうてい解明できていない。